

Y05b 東京国際科学フェスティバル開催による「科学」を通じた地域コミュニティ形成の試みー第1回開催報告と第2回開催に向けてー

永井智哉、内藤誠一郎、縣秀彦(国立天文台)、北原和夫(国際基督教大学)、竹内富士夫(三鷹市)、山口亮三(三鷹ネットワーク大学推進機構)、佐々義子(くらしとバイオプラザ21)、滝川洋二(ガリレオ工房)、ほか第1回東京国際科学フェスティバル実行委員会

第1回東京国際科学フェスティバル実行委員会は、市民・子供たちが、科学を楽しみ、技術に親しむお祭りであり、地域における『科学好き市民』のコミュニティ形成や、科学文化の街としての観光資源、市民と企業、大学・研究機関、生涯学習施設、学校教育機関関係者との間のコミュニケーションの場となることを目的とした「第1回東京国際科学フェスティバル」(<http://tokyo.sci-fest.net/>)を2009年9月12~27日の16日間、三鷹を中心に都内全域を会場に開催した。特に、三鷹を中心とする地域には、居住地域のなかに、大学、研究機関、地場産業、博物館などが密集し、科学、技術、文化が、生活の場と隣り合わせで存在している。本イベントはこの地域の特徴を活かして、科学を楽しみ技術を親しむ人々の「地域の絆」を育み、将来は「世界の絆」へと広げていこうとするものであり、地域との連携による科学・地域コミュニケーションを増進する人材の育成を行って、科学文化による地域再生の先進事例となることを目指す試みである。

昨年第1回の開催においては、86団体・個人による110を超えるイベントが行われ、参加者数は約3万人であった。特に、自治体や研究・教育機関、企業などではない市民グループや個人が主催したイベントが約半数あったことなど、市民自ら企画し参加する「科学フェスティバル」がもたらす地域コミュニティ形成への効果や科学コミュニケーションとしての有効性について報告する。